

1 木曽三川を知る

古来より中部地方を支える木曽三川

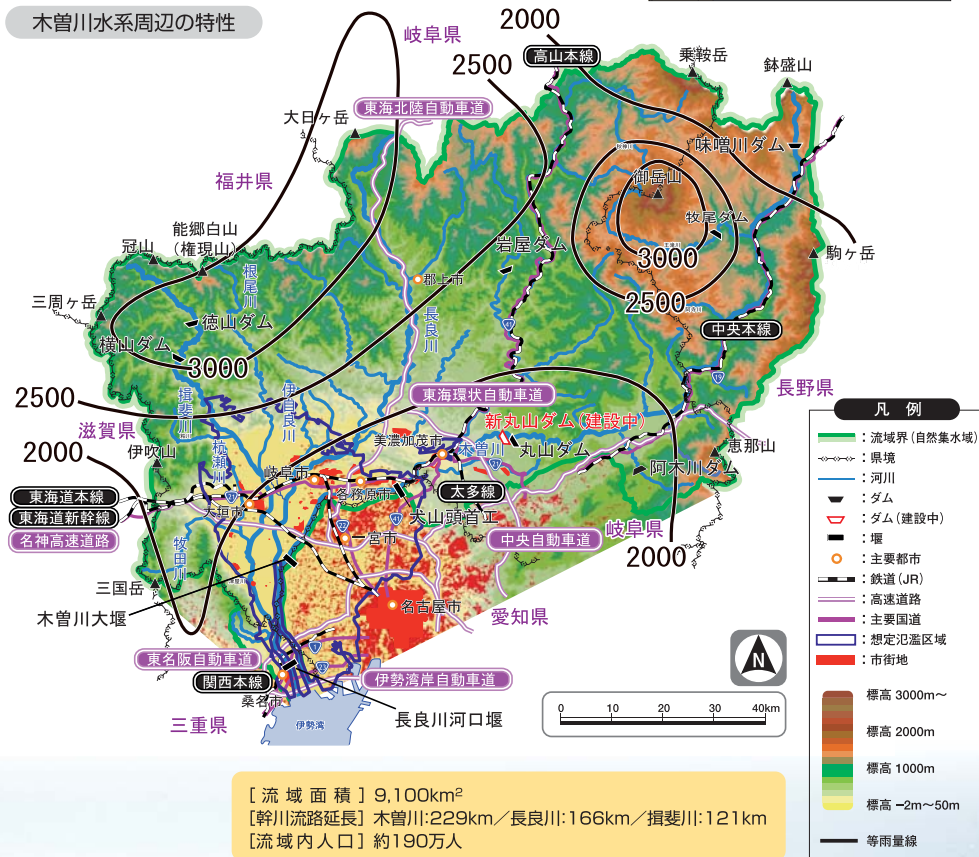
木曽三川とは、長野県木祖村の鉢盛山を源とする「木曽川」と、岐阜県郡上市の大日ヶ岳を源とする「長良川」、岐阜県揖斐川町の冠山を源とする「揖斐川」の三つの河川のことを指し、これら三川の流域面積は9,100km²と我が国でも有数の規模を誇る河川です。

木曽三川の流域は、長野県、岐阜県、愛知県、三重県、滋賀県の5県にまたがり、その流域内の人口は約190万人にも達します。

また流域内には、名神高速道路、東海道新幹線、JR東海道本線など、東西を結ぶ国土の基幹となる交通の要衝としても重要な地域となっています。

木曽三川は豊かな自然と豊富な水量を抱き、その人々の暮らし、農業生産、社会・経済活動に必要な水を古来より供給してきた歴史があります。木曽三川は中部地方の人々の暮らし、経済、産業、社会、文化と密接に関連しており、この水を適切に管理することは、中部地方にとって極めて重要です。

木曽川水系周辺の特性



地域の暮らし・発展・自然環境に欠かせない木曽三川の特徴

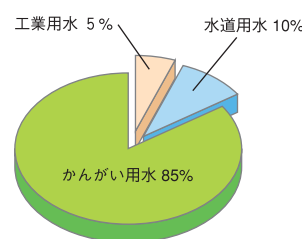
■洪水に弱い日本有数の海拔ゼロメートル地帯

木曽三川の流域内に存在する濃尾平野は、我が国最大規模の海拔ゼロメートル地帯であるため、堤防の決壊などが生じると極めて大きな被害が発生しやすいという特徴があります。



■木曽三川の水利用（かんがい用水、都市用水、発電）

木曽三川の水は、かんがい用水として390m³/s、都市用水として72m³/s（水道用水約46m³/s、工業用水約26m³/s）の水量が、濃尾平野、知多半島、北中勢地方等へ供給されています。また、木曽川では大正13年に我が国初の本格的なダム式発電所である大井ダムが造られてから、発電ダムによる電源開発が急速に増加してきました。現在、木曽川水系には86箇所の水力発電所が設置され、総最大出力は約558万kWにおよび、中部、関西地方の電力需要に対する供給力として重要な役割を担っています。



木曽三川の水利用の内訳



大井ダム発電所

■自然豊かな木曽三川の自然環境

木曽三川の上流域には飛騨木曽川国定公園など河川景観と密接に関わる自然豊かな情景が多数存在します。また、アユやヤリタナゴ、ヤマトシジミ、シナイモロコなど綺麗な水や豊富な水量と密接に関連する生物が多数生息しています。



アユ

安定していた木曽三川の水量のバランスが崩れてしまったら！

洪水被害

木曽三川の河川等の整備は順次行ってきましたが、木曽川では昭和58年9月、長良川では平成16年10月、揖斐川では平成14年7月に戦後最大規模の洪水が発生しました。洪水は、時に人の生命をおびやかす、家屋浸水や農作物被害など大きな損失を生む他、経済活動の停滞、交通機関の麻痺など、地域の暮らしに支障を与えます。

■木曽川



昭和58年9月洪水
美濃加茂市街の浸水状況

■長良川



平成16年10月洪水
岐阜市福富地内の浸水状況

■揖斐川



平成14年7月洪水
大谷川の浸水状況

環境被害

木曽三川の水が減少すると、人間の暮らしだけではなく、魚やシジミが斃死したり、更には木曽川日本ライン下り、長良川鶴飼いの大型船の運航中止、地盤沈下の進行など、河川環境において様々な被害が発生します。

渇水被害

木曽三川の水は多くの人々や、様々な目的に使われているため、雨が少なくなると、どうしても水が不足がちになってしまいます。このような渇水が発生すると飲み水が不足して私たちの暮らしに影響がでる他、農業、工業、水力発電にも支障が生じてきます。



給水車による給水



平成6年8月 牧尾ダム



アユの斃死（根尾川下座倉橋脚）



水も船も底をついた

ライン下りも取りやめ

用語解説

幹川流路延長

一つの水系の中で流量・流域面積の大きいものを「幹川」といい、河口から谷さかのぼった分水界上の点までの流路の延長をいいます。

想定氾濫区域

水防法の規定により指定された浸水想定区域をいいます。